

---

Emblem of Story 紋章物語

杏子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Emblem of Story 紋章物語

### 【Zコード】

Z0769Z

### 【作者名】

杏子

### 【あらすじ】

時空の扉を越えて、数々の仲間が集まるファンタジー小説。

「ファイアーエムブレム」の歴代シリーズから、数々の仲間が集い、主人公たちと出会い、そして共に戦う。

時空を越えた出会いが、歴史を変える。

## Prologue? 静を越えて（前書き）

一人の青年が故郷から別天地へ目指す。  
しかし、その途中に不思議な大きな扉を発見。その扉には取っ手が  
付いておらず、開けたくても開けられなかつた。  
・・・しかし？

# Prologue? 静を越えて

【Prologue 静を越えて】

『お兄ちゃん、本当にいくの?』

一人の青年の脳裏に、今までずっと傍にいた妹の声が過ぎた。

彼は今まで過ぎしてきた皆に背を向けて歩き始めようとした。しかし、最後に顔だけを皆に向け、そして何も言わずにその場から去つて行つた。

そして青年は森道を一人歩く。ずっと道が続く中、彼はふと視線をずらした。

「・・・何だ?」

彼はある物に気が付いた。木々の間から、うっすらと見える銀色の何かを見つけたのだ。

青年はその銀色の何かに向かつて走り出した。

青年は銀色の何かがある場所まで辿り着いた。

「これは・・・、扉か? にしても大きすぎる・・・。」

青年の前に聳え立つ一つの銀色の大きな扉。その扉には不思議な紋章が描かれている。

「しかし、取っ手が無いな。どうやって開けるんだ?」

「彼は扉を探り始めた。そしてあることに気が付いた。

「そういえば、裏側を見ていなかつたな。」

青年が扉の裏側に回りこもうとしたその時。なんと、扉が「キイツ」と音を立てて開き始めた。

「！？」

青年は驚き、扉が開く様子を凝視していた。そして扉が全開した。  
「な、何だ、この扉……」

彼は扉の奥から不思議な力を感じていた。それだけではなく、人の気配も感じ取った。

「誰だ・・・？ 奥から人の気配を感じる。」

青年は吸い込まれるようにその扉の奥へと足を運んだ。

「・・・！？」

青年が扉を潜った先は、見知らぬ場所だった。

「何だ、ここは・・・？」

彼はふと、後ろを振り返った。後ろには先程潜ってきた扉と全くデザインの扉が立っている。だが、扉は閉まっていた。

「戻れないのか・・・？」

青年は扉を調べたが、開く気配は全く無い。

「参ったな・・・。」

彼が頭を抱えていると、背後から声が聞こえた。

「・・・そこで何突つ立つてんだい？」

「？」

青年が後ろを振り返った。そこには赤い髪の女性が立っていた。女性は弓を背中に提げている。

「あんた、その扉を潜ってきたんだろう？」

「ああ、そうだが？ ここは一体何処なんだ？」

青年の質問に女性がこう答えた。

「ここはルナティア城だよ。まあ、扉を潜ってきたばかりのあんたには分からぬだろう？」

「・・・ここはテリウスじゃないのか？」

彼の問いに、女性はこう言つた。

「残念だけど、違うね。とりあえず陛下に会つて話を聞いたほうがいいだろ? ついて来な、案内するよ。」

「・・・」

女性が手招きするが、青年は混乱しているらしく、微動だにしない。「一応自己紹介しておくよ。私はアルテナ。アルテナ・アーネストさ。こここの城で将軍をやつてるよ。ちなみにあなたは名前何てんかい?」

「俺はアイク。グレイル傭兵団の団長だ。」

青年アイクはアルテナと名乗った女性から名前を聞かれたので答えた。

「それじゃあアイク、ついて来な。案内するよ。」

「・・・そうだな、とりあえず頼む、アルテナ將軍。」

アイクは決心が付いたのか、アルテナについて行くことにした。

アイクとアルテナの2人は大きな扉の前に着いた。

「・・・この先に陛下が居るよ。所でアイク、あんたはいつもその

口調かい?」

「ああ、皇帝の前でもこの話し方だ。礼儀は苦手でな。」

アイクの言葉に、アルテナはこう言った。

「なら私が彼に話しておくよ。とりあえずそれまでは黙つてくれるかい?」

「分かつた。」

アルテナが彼の言葉に頷くと、扉の前で「アルテナ・アーネスト、入るよ!」と叫んだ。すると、中から男性の声が聞こえてきた。

「アルテナか。分かつた、入るといい。」

そう声が聞こえると、アルテナが扉を開いた。そして2人は扉の奥の部屋へ足を進めた。

「陛下、今いいかい？」

「ああ、構わない。」

アルテナは今までとは変わらない口調でルナティア国王と話している。

「陛下、彼は礼儀が苦手らしく、敬語を話さないけど大丈夫？」

「問題ない。私はルナティア国王のシルヴァス・マーヴェリックだ。君の名前を聞こう。」

ルナティア国王シルヴァスが聞いた。

「俺はアイク。傭兵团の団長をやっている。」

アイクは玉座に座るシルヴァスを見て言った。すると、アルテナがこう口を開いた。

「アイクは『时空の扉』を潜ってきたんだよ。」

「何！？」

アルテナの言葉に、シルヴァスは驚いて立ち上がった。アイクは話がついて行けないのか、キヨトンとしている。

「ああ、アイクはまだ知らなかつたね。『时空の扉』って言つのは、さつきあんたが潜つてきたあの扉のことだよ。」

「そうだつたのか・・・。」

「しかし、まさか时空の扉が動き出すとはな・・・。」

シルヴァスの表情が突如険しくなつた。国王の様子を見たアイクが彼にこう聞いた。

「ルナティア国王、何か不味い事でもあるのか？」

アイクがそう言つと、シルヴァスがこう聞いた。

「アイク、落ち着いて聞いてくれるか？」

「ああ、何だ？」

アルテナの表情も変わつており、険しくなつていた。

「・・・君の故郷で、直に災いが起こるかもしねれない。」

「災い・・・？」

アイクは頭上に「？」を浮かべた。すると、アルテナが口を開いた。

「・・・つまり、近いうちに良くないことが起きるかもしれないん

だよ。もしかすると、あなたの傭兵団の仲間が危ないかも知れない。

「何だと！？」

アルテナの言葉に、アイクは驚いた。そして「すぐにテリウスに戻る！」と言い、玉座の間を出ようとしながら、アルテナが「無理だね。。。今すぐには戻れないよ。」と言った。

「どうしたことだ・・・？」

アイクの台詞に、シルヴァースがこう答えた。

「時空の扉は、空間が歪んだ時に開く扉でな、扉が開いたということは、空間が歪んだ証拠であり、災いを知らせる扉でもあるのだ。」

「・・・」

シルヴァースは話を続ける。

「その災いの殆どは、扉を潜った先の世界で起こっている。」

彼がそう言つと、アルテナがこう言つた。

「この周期だと次は5日後ぐらいだろうね・・・」

アルテナの言葉に、アイクは落ち着いてなかつた。しかし、シルヴァースはこう言つた。

「しかし、災いとは言え、過去では誰も犠牲者が居なかつたな。」

「？この現象は今回が初めてではないのか？」

アイクがそう言つと、シルヴァースがこう答えた。

「ああ、今回が初めてではないのだが、災いとは言つても、不思議なことに犠牲者が居ないのでね。」

彼の言葉に、少し落ち着いたアイクだった。

「そうか・・・」

すると、アルテナが「とりあえずアイクの部屋を用意させた方がいいんじゃない？」と言つた。彼女の言葉にシルヴァースが「そうだな。」と言つた。

「それじゃあ部屋はリオンに任せとくよ。」

アルテナがそう言つなり、2人は玉座の間を後にした。



## Prologue? 聖騎士、登場（前書き）

青年アイクは『時空の扉』を潜り、『ルナティア』と呼ばれるところに来た。

そこには、ルナティア將軍であるアルテナ・アーネストがいた。彼女の案内で国王シルヴァス・マーヴェリックの元へ。

彼に事情を話したアイクだが、国王の言葉から「直に災いが降りかかるだろ？」と予言される。

仲間に迫る危機、それを悟つたアイクは故郷に戻ろうとするが、5日過ぎないと戻れないことが発覚。

彼はそれまで城に居候することとなつた。

## Prologue? 聖騎士、登場

【Prologue? 聖騎士、登場】

「・・・あ。」

アルテナがふと足を止めた。

「どうしたんだ? アルテナ將軍。」

その後ろにはアイクの姿が。

実は今、アルテナはアイクを連れて城内を案内していくところだつた。

「そういえばリオンは訓練があつたねえ・・・。」

アルテナが頭を搔いた。

「・・・ところで將軍、『リオン』って誰なんだ?」

アイクは先程から彼女が口にしている『リオン』といつ名前が気になっていた。

「ああ、あとで紹介するつもりだつたけど、リオンって言つのは娘の名前だよ。」

「將軍には娘が居たのか。」

アイクがそういうと、アルテナが「仕方ない。」と首を振り、こう言つた。

「部屋の手配はリオンじゃなくて、別の誰かに頼みますか。」

アルテナがそう言つと、再びアイクを連れて城内を案内し始めた。

「・・・勝者、リオン!」

騎士団の訓練所では、訓練が行われていた。今は模擬戦が行われている。

「あー、やつぱりリオンは強いな。」

「俺さ、リオンがトップになるべきだと思つんだよな。」

「でもさ、リオンつてずっと首横に振つてんだろ?」

「きっと俺たちにチャンスをくれてるんだよー頑張ろつぜーー?」

騎士たちの間でそんな会話が飛び交っていた。

「よし、次はお前たちの組だ。リオン、お前は下がつていいぞ。」

「はい。」

彼女がリオン。リオン・アーネスト。ルナティア聖騎士団に所属する女性騎士だ。

すると、一人の騎士が慌てた様子で騎士たちに近づいた。

「た、大変だ!!」

「？」

リオンは訓練用の剣を片付けに行こうと、騎士舎に向かおうとしたが、慌てた様子の騎士のところへ向かった。

「・・・おい、どうしたんだよ?」

一人の騎士が、慌てている騎士に話しかけた。

「じ、時空の扉が・・・開いたんだよ!」

「!?」

彼の言葉に、騎士たちの間に沈黙が走った。

すると、「お前たち、どうしたんだ?」といつ声が聞こえてきた。リオンを含む騎士たちが後ろを振り返ると、そこには剣を背に提升了男性が立っていた。

「ケルビム将軍!」

「どうしたんだ?」

先程の慌てていた騎士が、将軍に近づいてこう言った。

「実は、時空の扉が開いたとの報告がありました。」

「扉が?開いたのか?」

ケルビムがそう言つと、騎士が頷いた。嘘ではないと確信したケルビムが、騎士たちにこう言つた。

「皆、よく聞くんだ。扉が開いたということは、近いうち扉の向

こうで災いが降りかかる。もしかすると、既に災いが起つてゐる可能性が高い。……そこで、俺とアルテナ、そして騎士団の中から選抜した者を扉の奥の世界に向かわせる。」

「！？」

騎士たちは彼の台詞に驚愕した。

「そうだな・・・。」

ケルビムは騎士たちの顔を見回した。そして視線が誰かと合つた。

「よし、リオン、お前にしよう。」

「！」

リオンはまさかと思い、彼の傍まで近づいた。

「皆、今回の調査は俺とアルテナ、そしてリオンと向かうことにすむ。異議ある者は？」

彼の言葉に誰も異議は無く、全員で「異議なしです！」と言つた。

すると、リオンが彼にこう聞いた。

「将軍、私でよろしいのですか？」

「いいから選んだんだろ？。」

「・・・。」

ケルビムのあつけない答えに黙り込んでしまつたリオン。

「リオン、あんたら出来る！」

「俺たちはいつでも帰りを待つてるぜ！』

仲間たちの励ましを受け、リオンは頷いた。

「・・・必ず戻ります。どうか、その間姫をよろしくお願ひします。」

「

彼女は仲間たちにお辞儀をした。そしてケルビムが「準備して玉座の間に来い。」と言つた。リオンは頷き、訓練所を後にした。

「さて、城の案内はこれぐらいだつたかな。」

アルテナとアイクは城内を歩き廻くした。

「ルナティア城は広いんだな。・・・迷いそうだ。」

彼の言葉に。アルテナが軽く笑つて言った。

「大丈夫さ、その内慣れる慣れる！」

そう言うなり、アイクの肩をポンポンと叩いた。すると、「アルテナさん！」と手を振りながら誰かが走つて来た。

「ああ、ルーシア、部屋の準備は終わつた？」

「終わつたわよ。」

「ありがとさん！丁度あんたがいて助かつたよ。」

アルテナがそう言つと、ルーシアは「こんなの朝飯前よー。」ヒヤー

スして言つた。

「・・・。」

アイクは陽気な女性を見つめていた。すると、アルテナが「紹介するよ。」と言つた。

「彼女はルーシア。ルナティアの情報屋だよ。」

「情報屋？」

「そうよ。私は各地の情報を集めては、皆に話してるので。もちろん、扉が開いたことももう皆知ってるわ。」

ルーシアがそう言つた。すると、彼女が「これからよろしく、アイク！」と言い、彼女は何処かへと走つて行つた。

「まあともかく、次は城下町を・・・。」

アルテナとアイクが城を出ようとしたその時だつた。

「アルテナ将軍！」

誰かに呼ばれたアルテナはふと振り返ると、そこには一人の女性が立つていた。

「おや、姫さんじゃないか！」

「姫・・・？」

アイクが女性を見て言つた。

「お父様がお呼びです。既にケルビム将軍が玉座の間にいらっしゃいます。」

「・・・どうやら一仕事来そうだね。所でリオンは？」

「リオンもいます。」

「分かつた、今すぐ行きたいところだけど・・・。」

アルテナがアイクを見た。すると、『姫』と呼ばれた女性は「私が城下町を案内します。」と言った。

「それじゃあ、お願い出来るかい、姫さん？」

「はい、お任せ下さい。」

アルテナがそう言つと、急いで玉座の間へと走つて行つた。

「・・・あんた、この国の姫なのか？」

「はい。ルナティア王女のアスカ・マーヴェリックと申します。」

アスカと名乗つたルナティア王女アスカはアイクにニコッとした。

P r o l o g u e ? 向けりつ（前書き）

「時空の扉が開いた！」

聖騎士の報告が、ルナティア將軍ケルビム・アーネストの元へと届く。

全てを悟ったケルビムは、娘のリオン・アーネストと共に扉の『向こう』の世界へ向かうことを決意。リオンにとっては近くで遠い遠征に向かうこととなる。

## Prologue? 向こうへ

### 【Prologue? 向こうへ】

「さて、3人揃つたか?」

「いえ、まだアルテナ將軍が・・・・。」

リオンが言葉を続けようとしたその時、扉の奥から「アルテナ、入るよ!」と声が聞こえ、扉が開いた。

「遅かつたな。<sup>そば</sup>」

リオンの傍に立っているケルビムが一言。

「ちょっと客人を案内してたんだよ。」

アルテナがそう言つていると、リオンがアイコンタクトで「話が始まる」と合図を送ったので、アルテナとケルビムは国王シルヴァスに視線を向けた。

「さて、今回集まつて貰つたのは『时空の扉』の件だ。もう分かっているかも知れんが、3人には、扉の『向こう』へ調査に行ってほしいのだ。」

「調査とは、『災い』の事ですか?」

リオンがシルヴァスにそう問うと彼は頷いた。

「先程、アイク殿の故郷と繋がつていたが、今は違う場所に繋がつているだろう。」

「・・・・・」

3人は黙りこむ。

「3人は知つているだろ?が、时空の扉が開くのは1日に最高2回で、これから扉を開けば、明日までは開かない。」

「と言うことはだ、結論を言えば今日は1人しか扉を潜れないってことだな。そして、今日誰が扉の『向こう』に行くかを決めるってところか?」

「流石はケルビム。君は昔から察しが早いな。」

シルヴァスは軽く笑うなり、玉座から立ち上がって言った。

「さて、今日は誰から行こうか？私は誰でも構わないが？」

彼の言葉に、アルテナがバツと拳手した。

「私はリオンを推す。」

「！？」

リオンはアルテナからの推薦に、目を見開いた。すると、シルヴァスがこう聞いた。

「では質問だ。アルテナは何故、娘のリオンを薦めたのだ？」

「理由は簡単さ。リオンは今まで扉の奥に行つた事が無い。こう言う体験は早いうちに経験した方が良いだらうって思ったんだよ。だからさ。」

アルテナは少し焦っているリオンを指指して言った。

「・・・では、俺もリオンを薦めよう。理由はアルテナと同意見だ。リオン、異議はあるか？」

周囲からの視線が一気にリオンに向けられた。

「・・・・・。」

判断に困るリオンだが、率直な意見を彼らにぶつけた。

「・・・・・正直な気持ちを申しますと、不安があります。」

思いを告げたりオンは、言葉を切る。が、腹を括りこう言った。

「ですが、私は扉の『向こう』で何が起きているのかを、この『田』で確かめたいです。」

リオンの言葉を聞いたシルヴァスは「そうか。」と呟いた。ケルビムとアルテナの2人は「よく言った！」と肩を叩いた。

「ではリオン、もう直ぐにでも行けるのか？」

「はい。」

彼女の返事に、シルヴァスは傍に立っている騎士に「玉座を頼む」と言い、アルテナ、ケルビム、リオンは时空の扉の元へ向かうのだった。

「さて、私たちはいつでも見送りオーケーよー。」

ルーシアがふんぞり返つてそう言つたが、リオンがジト目で見たので、ルーシアは普通の体勢に戻した。

リオンの前には时空の扉、その後ろにシルヴァスやアルテナ、ケルビムに騎士団の仲間たちが立っている。アイクは居ない。

「リオン、気をつけて！」

ルーシアは右手で拳を作り、真上に上げた。

「気張つて来なよ！」

アルテナは持つていた弓でキメポーズをした。

「もしも、身動きが取れる者がいたら連れて來い。定位置に居ては危険だからな。」

ケルビムはリオンの紅い瞳を見つめて言つた。リオンは頷いた。

「リオン。」

シルヴァスが一步踏み出して彼女の名を呼んだ。

「・・・帰つて来るんだ。何があつてもな。そして、もし動ける者は連れて來い。これが私からの命令だ。」

シルヴァスが下した命令に、リオンは「了解！」と敬礼した。と、その時だつた。

时空の扉が大きな音を立て、ゆっくりと扉が開いたのだ。それと同時にリオンの右手が緑色輝いている。

『フォースクリエイション創生紋章』<sup>フオースクリエイション</sup>が発動しているのだ。

「リオン、この扉の『向こう』には君の知らない『世界』が広がっている。どんな災いが起きているか分からぬ。さあ、行くんだ！ リオン！」

シルヴァスの言葉に、リオンは息を飲み、扉にゆっくり近づいた。扉が開いた先は、鏡のように自分が映つてゐるだけである。リオンは扉を潜る直前、後ろを振り返つた。そして、全員に一言こう言つた。

『リオン・アーネスト、任務に参ります！』

リオンはそう言つと、全員が頷いた。そして彼女は扉の奥へ、姿を消したのだつた。

「・・・行つたね。」

アルテナが呟いた。

「リオン・・・、戻つて来るんだぞ。」

ケルビムが寂しそうに呟いた。

一方、王女アスカは「どうと、アイクと城下町を歩いていた。  
「・・・！」

アスカは突然立ち止まつた。そしてルナティア城を見た。

「どうした？アスカ姫。」

アイクは立ち止まつたアスカの顔を見た。

「あっ・・・、いえ・・・。」

アスカは首を横に振り、「何でもありません。」と言い、再び足を進めた。すると、アイクが話し掛けで來た。

「アスカ姫、1つ聞いてもいいか？」

「はい、何でしようか？アイク殿。」

アイクは彼女にこう聞いた。

「アルテナ將軍の、娘のリオンと言う女が気になるんだが。」

彼は気になつていたリオンの事を聞いてみた。

「リオンはどういう人か知つていてるか？」

「はい。リオンはルナティア聖騎士団の一員であり、私の幼馴染みであります。」

アスカは歩きながら話し始めた。

「・・・どこかに座りませんか？少々長話になるかと思いますので。

「

2人は近くのベンチに腰掛けることにした。

## Prologue? 静寂の世界（前書き）

時空の扉を越え、別世界へと到達するリオン。しかし、別世界には『妙な空気』が流れていた・・・。

この章は短めです。

## Prologue? 静寂の世界

【Prologue? 静寂の世界】

時空の扉を潜り抜け、別世界へと到達したリオン。

「・・・」

彼女は妙な気配を感じた。

(まさか、もう災いが・・・?)

リオンは探索を始めた。

「なつ・・・！」

リオンは驚愕きょうがくし、その場に立ち止まつた。

彼女が見たのは、沢山の人々が倒れている光景だった。しかし、倒れている人々に不自然な点が。

不自然な点とは、誰も『血を流していない』こと。

リオンは傍で倒れている人に近づき、屈んで触れてみた。

「死んでは・・・、無い。体温はあるのに何故・・・?」

『災い』と言うより、『怪奇現象』だった。

「どういうこと・・・?」

リオンは立ち上がり、周囲を見回した。

「・・・仕方ない、もう少し探索して原因を突き止めないと!」

彼女は倒れている人々を踏まないよう、町中を走る。

(誰かいの・・・かな?)

周囲を見回しながら走っていると、前方から声が聞こえてきた。

「誰か、居ないのか!?」

「!」

リオンは声を聞いて安堵したが、直ぐに声に答えた。

「ここに居ます！」

彼女は声の聞こえる方角へ足を進めた。すると、正面に人が立っていた。

青髪の青年だ。

「・・・あれ、君は一体？」

青年はリオンがこの世界の者ではないと察知したようだ。

「私はリオン・アーネストと申します。」

「僕はマルス。マルス・ローウェル。このアリティアの王子なんだ。」

青髪の青年の名はマルス。このアリティアと呼ばれる国の王子だと  
言う。

「王子、後動ける方はいらっしゃらないのですか？」

「それが、今動けるのは僕だけみたいなんだ・・・。」

「そうですか・・・。」

リオンは表情が暗くなってしまった。だが、「長居は禁物」と言つ

ことを思い出した。すると、マルスがリオンにこう言つた。

「リオン、何処か安全な場所に行こう！」

「はい。長居は危険です。ルナティアに参りましよう！」

リオンがそう言つと、マルスが「ルナティア・・・？」と言つた。

「私がご案内いたします。こちらです。」

リオンはマルスよりも前を歩き、『时空の扉』の元へと向かつた。

## P r ologue? 新たな出会い（前書き）

リオンはアリティア王子、マルスと出会い。

そして、彼と共に時空の扉を手指す。しかし、思わぬ事態が発生してしまったのだった・・・。

その一方、リオンとケルビムとは別の世界に向かったアルテナは、時空の扉の前で立っていた。

## Prologue? 新たな出会い

### 【Prologue? 新たな出会い】

「リオン、『时空の扉』って一体何なんだい？」  
マルスが走りながらリオンに聞いた。

「詳しいことは后ほどお話致しますが、空间を繋ぐ扉です。扉を越えることで、别世界に行くことが出来ます。」

「别世界……？」

リオンがマルスの言葉に頷いた。そして、マルスはることに気がついた。

「まさか、君は『别世界』から来たのか……？」  
「はい。仰るとおりです。」

そう会話を交わしながら走っていると、目の前に銀色の扉が見えてきた。

「王子、あれが『时空の扉』です！」  
リオンが扉を指して言った。

「・・・これが、『时空の扉』なのか……。」  
マルスは时空の扉を見つめて言った。

「时空の扉・・・開かないかな・・・。」

リオンがそう呟いた時だった。扉が大きな音を立てて開き始めた。  
「！」

マルスは目を見開いて扉を見つめている。そして扉が大きく開き、

目の前にリオンとマルスの姿が映し出された。

「え・・・、僕が映つてる・・・。」

リオンはマルスに「ルナティアに参りましょう!」と言った。しかし、マルスはその場に立っていた。

「……王子? どうなさいましたか?」

「リオン、一つ聞きたい。」

彼の言葉に、「はい、何でしうか?」と聞いた。

「ここには、帰つて来れるんだよね?」

マルスのセリフに、リオンは頷いてこう言つた。

「はい。この騒動が静まつた時、また帰れます。」

リオンがそう言つと、マルスが決意したのか、リオンに「行こう!」と言つた。

「……はい!」

そして2人は時空の扉を潜くぐつた。

リオンとマルスの2人は扉を潜り、ルナティア城に到着した。

「……と思われたが、ルナティアではない場所に到着してしまつた。」

「……つな!?」

リオンは目を見開き、周囲を見回した。

「リオン、ここがルナティアかい?」

何も知らないマルスは、リオンにそう聞いた。しかし、リオンは「違います……。」と言つた。

「普通ならば、ルナティア城に繋がつているはずですが……。」

「じゃあ、僕たちは違うところに飛ばされた……?」

マルスがそう言つた。

（……間違いない、私たちは別の場所に飛ばされてる。でも、一体何があつたんだろう……?）

リオンは一瞬戸惑つてしまつた。しかし、マルスが彼女にこう言つた。

「リオン、辺りを探索してみよう。」

「・・・はい。」

2人は探索を始めたことにした。

時は遡り<sup>さかのぼ</sup>、リオンが扉を潜つた2日後のこと。  
ルナティア將軍アルテナは、扉を潜つたばかりで、扉の前に立つて  
いた。

「さあて、何処に行こうか・・・。」

アルテナが腕を組んで考えていた時のことだった。少し遠い場所から声が聞こえてきた。

「セネリオ、こつちよー。」

「ミスト、本当にそのような物があるのですか?」

1人は女の子、そしてもう1人は男の子だ。

「つと、隠れないと!」

アルテナは木の陰に身を隠し、様子を見ることにした。

そして、扉の前に女の子（ミストとか言う名前の）と男の子（セネリオとか言う名前の）が姿を現した。

「・・・これなんだけど。」

「このような物は以前無かつた気がしますが・・・。」

2人は扉に近づいた。すると、セネリオが扉を調べ始めた。

「変ですね。普通の扉ならば取っ手が付いている筈ですが・・・。」

「えつ、取つ手付いてないの!?」

ミストがそう言うと、セネリオは頷いた。

「どうやつて扉は開くのでしようか・・・?」

セネリオがそう呟くと、ミストがある事を言つた。

「お兄ちゃん、この扉を通つていったのかな?」

この言葉に、アルテナはアイクの姿を思い出した。

「・・・アイクですか。確かに彼ならばこの扉を潜つた可能性は無くもありません。しかし、扉が開かなければ・・・。」

セネリオのセリフでアルテナは確信した。

彼らはアイクの仲間であること。

アルテナはアイクの仲間ならば、話が出来るだらうと思つたのか、こう言つた。

「あなたたち、グレイル傭兵团とか言つ傭兵团の一員かい？」

「！？」

セネリオとミストが驚いて扉から離れた。そしてミストが恐る恐る「そうですけど・・・？」と言つた。

「良かつた、傭兵团の団長さんならあたしの故郷に居るよー。」

「・・・！？」

アルテナは木の陰から出て、2人に姿を見せた。

「大丈夫だよ、あたしはアイクと親しいからね。」

「あなたは一体・・・」

セネリオがそう聞くと、アルテナはこう答えた。

「あたしは故郷で將軍をしてるアルテナって言つひ使いさ。」

そう言つと、ミストが「私、ミストです。」と言つた。セネリオも「僕はセネリオです。」と答えた。

「ミストにセネリオだね？・・・ちなみに伝えておくけれど、アイクはこの扉を潜つたよ。」

「・・・やつぱり！」

ミストは少し呆れ氣味に言つた。

「あ、それと2人に聞くけど、ここ最近変わつたことは無い？」

アルテナの言葉に、ミストとセネリオが顔を合わせ、こう言つた。

「変わつたことと言えれば、各地でおかしな現象が起きていることが噂になつています。」

「おかしな現象？・・・その話、詳しく聞かせてくれないかい？」

セネリオのセリフに、アルテナは眉間に皺しゃわ寄せた。すると、ミストがアルテナにこう提案した。

「傭兵团の仲間が詳しく述べてます。だから、傭兵团の皆に来ませんか？」

「砦？」

アルテナが首を傾げた。

「はい。近くにあります。」

セネリオが一言付け加えた。

「そうだね・・・、アイクの仲間なら是非話を聞きたい。お邪魔したいけど、大丈夫かい？ いきなり見ず知らずの『』使いなんぞ迎えて？」

アルテナの言葉に、ミストは「お兄ちゃんの仲間だつて言えば大丈夫です！」と言った。セネリオも「アイクと親しいのであれば問題ありません。」と言つた。

「じゃあ、お言葉に甘えて行くとしようか！ 案内してくれるかい？」  
アルテナはミスト、セネリオの案内で傭兵団の砦に向かうことになったのだった。

## P r o l o g u e ? 傭兵団の仲間たち（前書き）

『時空の扉』を潜り、別世界へと到達したアルテナ。扉の前で立ち往生していたが驚くことに、ルナティアへ来たアイクの仲間である傭兵団員のミスト、セネリオと出会つ。2人の話を聞き、この世界でも「異変」が起きている事が判明。アルテナは2人の仲間から話を聞こうと、傭兵団の皆に向かつこととなつた。

## Prologue? 傭兵団の仲間たち

【Prologue? 傭兵団の仲間たち】

アルテナはミスト、セネリオと共に砦を目指していた。  
(「へえ、ここがアイクの故郷か……。」)

アイクと親しいアルテナは、自分がラッキーに思えていた。  
「それにしても、まさかアイクに妹がいるとは思って無かつたよ。」「意外でしたか?」

アルテナの呟きにミストが聞いた。

「しかしミストとセネリオはしつかりしているイメージがあるねえ。娘とは大違ひだよ。」

「アルテナ将軍は娘がいるのですか?」

セネリオがそう聞くと、アルテナは「ああ、一人っ子だけど。」と答えた。

すると、ミストが「あの建物です!」と言つた。

砦の入り口に向かつた3人の前に、翼を生やした男が3人立つていた。

「鷹王様!」

ミストがそう叫び、彼らの近くに走つて行つた。

「・・・へえ、アイクの故郷にもいるんだねえ。」「?」

アルテナのセリフにセネリオは首を傾げた。

「アルテナ将軍は彼らを見ても驚かないのですか?」

セネリオの問いに、アルテナは笑いながらこう言つた。

「ああ、もう見慣れてるからね。」

「見慣れている・・・と言いますと?」

アルテナはセネリオに視線を向けて言った。

「あたしの国にも彼らみたいな種族はいるからね。」

彼女のセリフに、セネリオは「他の世界にもいたのですね・・・。」

と言つた。

2人が会話を交わしていると、ミストが慌ててアルテナの元へと走つて來た。

「アルテナさん、中に入りましょ~?」

ミストがそう言つと、アルテナはミストについて言つた。

「みんな、ただいま!」

ミストが元気良くそう言つた。すると、近くの扉が開き、赤い髪の女性が出てきた。

「あら、ミスト、セネリオ、もう帰つて來たのね。・・・隨分とお客様を連れて。」

「副団長、アイクの知り合いの方を連れて來ました。アルテナ將軍です。」

セネリオの紹介に、傭兵团の副団長ティアマトは「アイクの知り合い・・・?」と呴いた。アルテナは彼女の呴きに答えるかのように、首を縦に振り、頷いた。

「アイクは、旅先でも色んな人と関わっているのね。」

ティアマトがそう言つと、ミストは「お兄ちゃんは上手くやつてるかな・・・?」と言つた。

すると、アルテナの横に立つていた男が口を挟んできた。

「・・・本題に入るぜ?」

「あつ、はい!」

ミストは慌てながら4人を案内した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0769z/>

Emblem of Story 紋章物語

2011年12月19日11時47分発行